
Drops—ドロップス—

あきざくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dropseedロップスー

【Nコード】

N8018C

【作者名】

あきざくら

【あらすじ】

コナンは蘭達の前から去り、新一は蘭に別れを告げ、そして黒の組織との対決が始まった。平次や怪盗キッドこと黒羽快斗も戦いに参戦するが、結果は最悪の方向に向かう……。それから時がたち、残された蘭達は大学生になった。*物書き修行中につき、何度も校正する可能性あり。ご了承ください*作者多忙につき執筆活動休止中*

ブローグ

カンカンカン……

廃虚ビルの脇に備え付けられた非常階段を、屋上を目指して登って行く小さな影が二つ、夜の月明かりに照らし出される。町の明かりは遠くで踊り、まだ寝静まると言う時間帯ではないが、この辺りは静かに静まりかえっていた。

階段を黙々と登っていた二人は屋上に到達すると、水道タンクの上で待ち構えていた、白い衣装に身を包んだ人物を確認し、口元を緩めた。

ヒュウ——と、風が間を吹き抜けていく。

「ようやく、牢獄に入る決心でもついたのか？ コソドロさんよ」
江戸川コナンが、額に浮き出て来た汗を服の袖で拭った。そして、ズボンのポケットに手を突っ込む。

「私まで呼び出すなんて、どういう風の吹き回しかしらね……」
灰原哀が、上がった息を整えながら、そつと腕を組んだ。冷淡な視線を投げかける。

「そんなに警戒しないで下さいよ。今日はお二人に大切な話があるのですから」

コソドロと呼ばれた白いショール衣装に身を包んだ人物は、二人の様子に肩をすくめると、軽やかに水道タンクの上から降り立った。白いマントが風に翻る。そして、二人に向かって小さくお辞儀をした。

「はんっ！ あいにく、コソドロさん——怪盗キッドとかしこまって話しなざしたかないね」

「まあまあ、そう言わずに。今から、お話しする事は少なからず、貴方達が喉から手が出る程の情報。聞いて損は有りませんよ」

「情報？」

「ええ……。黒の組織について」

「！？」

含みを持たせた話し口調から、真面目なトーンになったキッドの口から出た単語に、二人は驚愕した。

黒の組織は、コナン達が追いかけている巨大犯罪組織だ。今まで何度か奴らと接触したことはあったが、最終的には尻尾さえも掴む事が出来ずにいた。

その黒の組織の情報となると……

二人は息を飲んだ。

「おっと、その前に一つだけ条件があります。私を仲間に入れて下さい——」

「は？」

思いも依らない台詞に、二人は呆然と目の前で頭を下げている白き罪人を見つめた。

マントが夜風にたなびく。

「こっちもワケありで、その黒の組織に用があるんだ」

キッドはそれまでのかしこまった口調から、話し方を一変させた。モノクルの奥の眼光が強くなる。

そして、決心したようにそっと深く被っていたシルクハットを取った。

——「俺の名前は黒羽快斗。名探偵と同じ高校生だぜ」——

町の明かりが遠くで舞い踊り、この廃墟ビルの辺りはシンと静まり返っていた。風が三人の間をすり抜けていく。どちらからともなく三人は近寄り、月明かりに照らされてできた影が重なった。

この時から、彼らの運命は、大きく動き出した。

プロローグ（後書き）

V S 黒の組織編でございます！

コナンのファンフィクションを書いている者としては一度はやって見たいお話。

実は、これ何年か前に途中まで書いていた物なんです。

この機会に、最後まで完結させるぞー！！

今後ともよろしくお願いします♪

第一話 ラストバトル

「こちら快斗。平次、新一、聞こえるか？」

「ああ」

「感度バツチリやで！」

ポリウムを抑えた快斗の呼びかけに、コナンと平次が答えた。

「計画通り向かいビルの屋上に来たぜ。後は合図を待つだけだ」

「了解。俺と灰原は今、目的の部屋の真上にいる。中に人はいない。予定通りに計画を実行する。平次はどうだ？」

高さの無い、狭い換気孔で状態を伏せていたコナンは、トランシーバーに小さく叫んだ。

「ああ、こつちも計画通りの地点にきてるで。見張りの奴らが何人か見える。いつ始めてもいいでー」

「了解」

先ほどの通信では、警察とFBIの配置準備が完了したとの連絡を受けてある。そして、快斗と平次も配置に着いた。すべてが計画通りに進んでいる。

満足そうにコナンはトランシーバーを切ると、後ろで同じように息を殺している灰原を振り返った。

「準備オーケーだそうだ」

「ついにこの時が来たのね」

灰原はそう言って小さく深呼吸をした。高鳴る心臓を押さえつけながら、きゅっとかぶしを握り締める。

「そういえば、あなた、蘭さんにはちゃんと説明したの？」

一つ、気になることがあって、灰原がコナンに尋ねた。

「……まあな」

答えになってない生返事に、灰原は訝しげに眉をひそめた。こん

な状況下で私事なんてやめて欲しい。今は、この戦いのことだけを考えていて欲しかった。

「いい？ わかってる？ 相手は奴らなのよ、冷静さを欠いたっ」

「わーってるよっ！！」

念を押す灰原にコナンは小さく声をあげた。

「やっとここまでこぎつけたんだ、覚悟は出来ている。ヘマはしないさ。それよりお前こそ大丈夫なのかよ？」

灰原は胸にためた息を一気に吐いた。

まったくだ。他人のことを言うより、自分の心配をした方がいいらしい。さつきから、心臓が暴れだして収まらないのだ。まあ、状況が状況だけにしょうがないと思うが。

ここは黒の組織のアジト。今、戦いが始まろうとしていた。

まさか、こんなちかくに奴等のアジトがあるなんて思ってもいなかった。

米花町にある某薬品製造会社。数日前に仲間になった怪盗キッドこと、黒羽快斗が持ってきた情報は完璧な物だった。そして、今日までこぎつけるのに、コナン達だけだと奴らに対抗できないからと、FBIや警察の一部の人物にコナンと灰原の正体をばらす事になった。

でも、今日で全てを終わりにするのだ。

コナンと灰原がいるのは、組織のメインコンピューターのある部屋の、真上の通気孔。すぐ下に無数のコンピューターが見える。中には誰もいない。

やるなら今だ！

コナンは大きく息を吸うとトランシーバーのスイッチを入れた。

「こちらコナン。予定通り計画は実行する。オメーら、準備はいい

か？ 今から3カウントする。カウントし終わったら戦いのスタートだ」

「おうつ！」

「ええでー！」

コナンは快斗と平次の威勢のよい声に口元を吊り上げた。そして、慎重に時を刻む。

「3つ」

「2つ」

「1つつ！」

瞬間、ドーンと地響きのような音が響いた。

そしてフツとアジト内を明るく照らしていた電気が消える。

「いくぞっ！ 灰原っ！！」

コナンはそう言つと、ネジをはずしておいた通気孔の蓋をはずして下に飛び降りた。それに続く灰原。

無駄な動きなくスタツと着地。そして、すばやく辺りを見回し、コナンに指示を送る。

「全ての情報は真ん中にあるメインコンピュータの中よっ！！」

そして自分はドアのところまで行き、出入り口の鍵を閉めた。これで、誰も入ってこれない。

コナンはポケットの中からMOを取りだすと、言われた通り真ん中のコンピュータにそれを差し込んだ。キーボードをたたき、全ての情報をコピーする。

「鍵は閉めたわ…でも、早くしないと奴らが来るっつ！」

「わぁーつてるよっ！」

灰原はドアの近くで外の気配を探る。

と、遠くからこちらに近づいてくる足音が2つ。

「奴らきたわよっ！」

いくらドアの鍵を閉めたといっても、ここは組織のアジトだ。気休めにしか過ぎない。

「よし！ これで全部だ！！」

すばやく、すべての情報をコピーし終わったMOを取り出し、コナンは灰原の方を振り返った。

そして、灰原を自分達が降りてきたところに押し上げ、続いて自らも通気孔に登った。

* * *

一方、アジト向かいのビルの屋上にいた快斗は合図とともにあたりに響いた爆発音を聞いていた。白い衣装が、夜風に揺れる。

「レディースアンドジェントルマン…さあ、ショウの始まりだ！」

快斗は、シルクハットを被り直すと、ビルの屋上から下を見下ろした。

（うはー出てくるね……）

爆発に驚いた、きつと組織の一番下っ端であろう工員が一斉に飛び出してきた。それを警察やFBIが残さず保護している。アジトに意識を集中させると、そこからは銃声が何発も聞こえてきている。

（さて、行きますか）

快斗は意を決して、ビルのコンクリートを蹴った。

アジト内部の構造なら頭に叩き込んである。先日、アジト内に潜り込み、施設の見取り図を手に入れてきたのは、他でもないこの自

分だ。

目指すは10階、研究室になっている所。

ハングライダーでいっきに近づき、トランプ銃で目の前のガラスを狙った。バリント！　と言う音とともにガラスが砕け散り、快斗は中に転がり入った。

とたんに、侵入者に気づいた黒の組織の一人に銃口を向けられ、快斗の背中に戦慄が走る。

（……撃つ）

瞬間的にそう判断した。

相手の指先の動きに全神経を集中させる。

（いまだっ！）

完全に相手の動きを読んだ。

わずかに顔を左に傾けると、シュツと、弾丸が頬を掠めた。モノクルが大きく揺れ、同時に軸足に力を入れ相手に飛び掛る。鮮やかに、快斗の回し蹴りが相手のこめかみに入った。

頭から豪快に吹っ飛ぶ黒の組織の一人。

「ふう、危なかったぜ」

詰めていた呼吸を吐き出すと、快斗は浮き出た汗を服の袖で拭いた。そして素早く辺りを見回し、他に敵がないことを確認した快斗は、持っていたトランシーバーのスイッチを入れた。

「こちら快斗、新一、予定通り進入は成功したぜ」

乱れた衣装を直し、部屋の隅へ移動しながら呼び出した先は、データをコピーし終わったコナンのもと。

「了解」

落ち着いた声が聞こえる。

この声のトーンからして、予定通りAPTXのデータは無事にコピーすることが出来たのであろう。この後は、コナン達と合流して、このアジトの中枢がある地下室へ行く手筈になっている。

「今から、そっち行くから……8階だよな？」

快斗は、慣れた手つきで、通気孔を開け、念入りに中を確認した。
「いや。快斗、お前は服部と一緒に10階から上を制圧してくれ」
「はあ？何言ってるの？計画じゃあ俺はお前と合流して地下室へ行くんじゃないのかよっ！」

聞いてねえぜ……。それに、そっちは一番やばい方だろ？

「おい、新一！お前何考えてんだよっ！」

トランシーバーに怒鳴りつける。目の前に、話してる相手がいな
い事がもどかしい。もしこの場にいたら、間違はなく一発ぶん殴っ
ていただろう。

快斗はグツと、握りこぶしを作った。

「服部にも、そうするように言ったら怒られたな」

自傷的な声が聞こえてきた。

「そうだろうな」

抑揚のない声で言った。ふつつつと怒りがこみ上げてくる。

「蘭の事を頼む。快斗。それからそっちの事は任せた」

プツツとそこで交信は一方的に途絶えた。

「おいっ、新一？ 新一！」

しかし、それからコナンの声が聞こえる事はなかった。

「何考えてんだよっ！あいつっつ！」

快斗はトランシーバーを思いつきり投げ捨てた。その衝撃で形が
歪み、中のパーツが飛び散る。

最悪のシナリオが脳裏を掠めた。

（ははっ……まさかな）

まさか、新一に限ってそんな事はない。この戦いを勝ち抜いて、
元の姿に戻ると言っていたのだから。

そして、蘭の元へと……。

* * *

「本当にいいのね？」

静かにトランシーバーの電源を切るコナンに灰原は尋ねた。

「ああ、覚悟は出来てるって言っただろ」

「いい心構えね」

「わかったんだよ。この戦いを本当に終わらせるには、どうしたら良いのかを」

そう……大切な人を守るために、この俺が、どんな行動をとるべきなのかを。

絶対、守りきってみせる。

コナンは、拳に力を込めた。

「これ、お前もってるよ」

そう言つて、コナンは先ほどのMOを灰原に投げた。

危うくそれをキャッチする。そして、それをすばやくポケットに突っ込む。

「それじゃあ、行きましょう」
「おう」

二人は、一気に駆け出した。

* * *

ドオン……。

蘭はその音を、米花町から離れたとあるホテル内で聞いていた。何かに耐えるように、唇をきゅっとかみ締め、両手でズボンの裾を握る。

蘭はたった数時間前にかかってきた電話のことを思い出していた。

——蘭、すまない——

その電話は、突然かかってきた。

開口一番、謝罪の言葉を述べる新一に、蘭は自分の耳を疑った。今朝は江戸川文代が突然やってきて、コナンは母親の元に帰っていた。今まで弟のように可愛がっていたコナンが突然帰ってしまったことで、ただでさえ今はとても落ち込んでいたのに。

いやな予感が蘭の脳裏をよぎった。

「……どうかしたの？」

突然謝られても意味がわからない。蘭は不安の気持ちを抱えたまま恐る恐る聞いてみた。

「すまない」

「何？どういう事？何で謝るの？」

今までに聞いた事のない声のトーンに、蘭は不安を振り払うように続けた。

「何か、あったの？ どう……したのよ、新一？ ねえ、教えてよ」

声えが震える。

「蘭。ごめんな」

本日、何度目かの謝罪の言葉。謝るのはいいから、理由が聞きたい。

「どうして……どうして、あやまるの？」

繋ぎ止めるように言う。

「……私、ずっと、ずっと待ってたよ新一の事を……今日まで。そしてこれからも」

蘭の目から、熱いものがあふれ出てきた。

「もし、他に好きな奴が出来たら……俺のこと、忘れていいからな」
「どうして！ そんなの嫌よっつー！」

受話器に向かって、大声で叫ぶ。

「ごめん。もう、時間がないんだ。どうか幸せに……蘭」

——「……ちょっと!! 待つてよ! しんいちいつ!!」——

新一……

蘭の瞳から、涙が零れた

「どうやら、何かが始まったみたいね」

妃英理が窓の外を見て言った。

ビルの隙間から、遠くの空が明らんでいるのがかすかに見える。

「……そうみたいだな」

小五郎がタバコに火をつける。

「あのガキ。何の説明もなしにこんな所に連れてきやがって」

悪態をつきながら、肺に貯めた煙をはきだした。

実際に、このホテルに連れてきたのはFBIなのだが、『もしもの事があるといけないから』と言って、FBIに従うようにと電話してきたのは新一なのだ。

しかも、ドアのところには見張りの捜査官がずつついている。

これじゃあ、まるで監禁されているようなもんだ。小五郎は、不機嫌そうに眉を寄せた。

「お前ら、何か知ってるか？」

小五郎は、同じように連れてこられた少年探偵団に疑問を投げかけた。しかし、彼らは頭を横に振るだけで、小五郎が期待した答えは返ってこなかった。少年探偵団だけでなく、一緒に連れてこられた鈴木園子、阿笠博士もお互いに顔を見合わせ、首を傾げる。

「まったく、やってらんねーぜ」

小五郎は短くなったタバコを灰皿に押し付けた。

同時に、大きな爆発音が再び響いた。先ほどより大きな振動が、建物の壁、机、椅子、すべてを振動させる。

——蘭つつ！らぁーんつつ！——

「えっ！！」

蘭は、不意に誰かに呼ばれたような気がして、窓の外を見た。

外は夜だというのに、爆発音がした方向は赤々と夜空を照らしていた。黙々と立ち昇る煙の塊は、何か別の怪物のように見える。

今の声は、新一？

蘭の胸はざわめき立った。

第二話 最悪のシナリオ

工藤新一の葬儀が行われたのはあの戦いから数日たった後だった。

実際、あの場にいたのは江戸川コナンだったが、コナンは戸籍上存在しない人物であり、一部の重要関係者がコナン＝工藤新一という事を知っていたので、その死は工藤新一のものとされた。もっとも、現場からはコナンの遺体は見つからなかったが、現場の状況、コナンの行方がわからない事、それから現場に僅かに残された血液から、そう判断されたのである。

灰原哀もまた、この戦いの死亡者となった。しかし、新一と違ってその死は秘密裏に処理された。

遺体のない葬儀……

事件現場は目も当てられない程、悲惨だった。

工藤新一の葬式は、人数こそ少なかったものの、参列者の顔ぶれにしては、質素に行われた。工藤新一は高校生探偵として有名であったが、メディアにはその死を一切伝える事なく、関係者のみしか知らない。警察関係者や事件に関わっていたFBIの死者も、灰原哀こと、宮野志保の存在さえも……。

先日の事件の事に関しても、薬品会社の管理不届きによる爆発事故としか伝えられていない。

事実、黒の組織の組員は略全員捕獲する事は出来たが、重要ポストについている数人の幹部の行方は分からずじまいだ。

何度かの爆発の性で、身元の判明しない幾つかの遺体はあったが、その中に行方の分からなくなっている幹部や、ボスが該当するのか

は謎だった。

事件の真相は、闇に葬られた。

しかし、黒の組織は組員の逮捕という形で、事実上の崩壊とされ事件は解決に向かった。

「すまない、蘭ちゃん……」

快斗は墓石の前で先ほどからずっと動かずに佇んでいる蘭に声をかけた。

あの日から、もう何回も繰り返している台詞。何度言っても、足りないような気がして、深々と頭を下げ続ける。

「もう、謝らないで」

蘭の声は細く消え入りそうなくらい小さかった。長い黒髪が風に揺れる。

「俺らのせいなんや……」

快斗の隣で首を垂れている平次が力なく呟いた。肩を落とし、その背中小さく見える。

「そんな事はない。君達は充分に頑張った」

そっと、優作が平次の肩に手を置く。その優しさが余計に平次を責めたてるようで、平次の目頭が熱くなる。

「そうじゃよ。君達が生きていてくれてよかった」

阿笠博士は、墓石に向かって静かに手を合わせた。

「新一君が馬鹿だったのよ……」

園子の鼻をすすする音が聞こえる。

「新一のやつ、俺に何の説明もなしにっ」

小五郎は拳を強く握りしめた。

「しんちゃんっ……！」

有希子が嗚咽とともに泣き叫ぶ。

空は悲しい位に青く綺麗で、風は泣きたい位に優しく吹き抜けて行く。何十基と並ぶ墓石の中に、まだ真新しい墓石が一つ増え、その前には黒の式服に身を包んだ人が数人立っていた。地面に何本も落ちる影が長い。

「本当にごめんな」

蘭にもういいと言われたが、それでも快斗は目の前で、墓石を見つめている少女に謝り続ける。

「いいのよ。あの状況でしようがなかったんだよね？」

蘭は、そんな快斗を振り返らずに、墓石に語りかけた。

まるで、そこに自分の幼なじみであり、ずっと思いを寄せている彼が居るかのように――。

* * *

「服部！ 快斗っ！ 来るなあっ！！」

崩れた瓦礫の壁の向こう側から、コナンの叫ぶ声が聞こえた。

爆発で崩れたのであろう。平次と快斗の目の前に、ボロボロに崩れ、それが幾重にも積み重なった瓦礫の壁が立ちはだかった。もちろん、向こう側は見えない。

「瓦礫の下敷きになつてないかつ！？」

快斗が大声で叫んだ。

これだけの量のコンクリート片だ。何かの拍子に崩れた瓦礫の下敷きになる可能性は高い。

二人に不安が横切った。

「心配しなくてもいいわよ。取り敢えず、今のところはね」

瓦礫の下敷きにはなっていないらしい。

相変わらず落ち着いた声に、平次と快斗はホッと胸をなでおろし

た。

「今、助けてやるからな！」

瓦礫の向こう側に声をかけて、快斗は目の前にあったコンクリートの塊をどけた。

その時。

「っ！！」

どけた途端に、目に入った物体に快斗は息を呑んだ。

「何やこれえ！？」

平次が、声を荒げる。

二十センチ四方の黒いプラスチックの塊。右上の隅には小さな赤いランプが灯り、簡素なデジタルディスプレイに刻まれた数字は、規則正しく変化していた。

「爆弾……」

快斗が呆然と呟いた。

ディスプレイに示された時間を読み取ると、爆発まで、あと15分。

「そういうことなんだ。悪いな」

コナンが何かを諦めたように呟くのが聞こえた。

「何が”悪い”んだよっ！？」

「せやっ！こんな爆弾の一つくらい、15分もあれば解体できるでっ！」

諦めたらあかん！ 平次ははげますように言った。

爆弾の解体の基礎は、もしもの時に備えて、頭に叩き込んである。

平次は、爆弾に手を伸ばした。

「一つなら、ね」

平次の行動を遮るように、灰原が冷めた声を出す。

「なんやて？」

意味深な灰原の返答に、平次は僅かに眉を吊り上げた。

「平次っ！ 見ろよっ！ あそこにもあるぜ」

危機迫る快斗の叫びに、平次は後ろを振り返った。

「!？」

「あれだけじゃない。あっちにも、そっちにも」

快斗が、辺りを見回す。

「いったい、いくつあるんやっ！」

その場所には、無数の爆弾が仕掛けられていた。

一つだけならまだしも、こんなたくさんあるとは。これでは、全ての爆弾を除去する事はとうてい出来ない。この瓦礫を取り除いて、あの二人を助け出すにも特殊な機械が要る。その機械を持つてくる時間もない。

「どうすればいいんやっつ!！」

平次は、思いつきり拳を壁に叩きつけた。

このままでは、二人を死なせてしまう組織を壊滅させて、元の体に戻る。今までそのためにここまでやってきたのにやるせない思いが溢れ出す。平次は思い切り歯をくいしばった。

「平次、快斗。逃げる。ここから早く!」

コナンが、あれこれと思考を巡らす二人に静かに諭した。

「残り時間はあと13分だ。大丈夫。お前らなら逃げれるよ」

「何言ってるのや! 何が何でも、絶対助けたる!」

「無理だよ。どんな事をしても。それより、一刻も早くここから離れる」

「せやかてっ!！」

「行けよっ!！そして、生きろっ」

コナンの声が、その場にこだました。

「新一……お前、本気でそういつてんのか？」

それまで黙って平次とのやり取りを聞いていた快斗が静かに尋ねた。

「言っておくが、俺は名探偵工藤新一だぜ?それに、ここにいるの

は例の薬を作った宮野志保だ」

「はあ？なに言って……むぐっ！」

突然意味不明なことを言い出したコナンに平次が訝しげな声を出す。

「わかったよ。名探偵」

快斗は、まだ何かいいたそうな平次の口を押さえて言った。

「ありがとう。快斗」

「はあ？ お前ら何言って、って、おいっ！！」

「いくよ。平次」

快斗は、未だに「ごちゃごちゃ」言ってる平次の腕を無理やり掴んで引く張った

平次の気持ちは、痛いほどわかる。俺だって、何とかしてやりた
いさ。でも、もう無理なんだ。このままここにいれば、間違いなく
俺たちも死ぬだろう。あと、残り11分。それだけの時間があれば、
もと来た道を戻り、窓ガラスを割って外に出ることが出来る。俺た
ちには、生きる道が残されてるんだ。だったら、生きなければ。

新一のためにも。

快斗は意を決した。

「蘭の事を頼む」

「ああ、もちろん」

快斗は瓦礫の壁に背を向けたまま目をゆっくり閉じ答えた。そし
て、平次の腕をおもむろに掴んだ。

「黒羽あつ！ 放せやああっつ！」

平次が快斗に力いっぱい握られた腕を解こうと暴れる。

「工藤が死んでまうやろっ！」

しかし、快斗は一向に放そうとせず引きずるように平次を連れて

行く

「こんの放せつ！　つつく、工藤おつっ！　死ぬんやないでえ！」
全身全霊必死に叫ぶ。

祈りは、新一に届いたのであろうか？

平次はついに観念したように快斗の歩に渋々従った。
歩みはやがて早歩きになり、そして駆け足になった。瓦礫の壁からどんどん離れて行く。窓に向かって全速力で走る。

「お前、拳銃、持ってるっ、だろっ！」

「ああっ！もちろん、やでっ！」

平次は、服の下に隠しておいた銃をホルダーから抜く。取り出した物を見て、快斗は満足そうに唇の端を上げた。その額には汗が滲んでいる。

「じゃあ、それでっ、目の前の、窓ガラスをっ、割ってくれっ！」

快斗が息切れをしながらも、平次に指示を出す。

間発をいれず、平次が数発目の前の窓ガラスに向かって打ち込んだ。バリリンツつと、ガラスが割れ砕け、目の前に夜空が広がる。外の風がなだれ込んで来た。

よし……いまだっ！

ガラスが割れたのを確認した快斗は腰にセットしたボタンを押した。

一人用のハングライダーに、男もう一人分の体重は明らかに重量オーバーだ。だけど、下まで滑降できれば。

背中に装着したハングライダーがわずかに開く。同時に、快斗は隣を走ってる平次を抱えた。

「おわっ！？」

快斗は、割れた窓の縁を、平次を抱えたまま思いつき蹴って外に飛び出した。

ハングライダーが風を捉え、身体が宙に浮く。

ごめんな……新一。

大きな爆発が起こった。

* * *

事件の処理が一段落した後、平次と快斗はFBIによって安全な場所に保護されていた蘭達と合流した。

まだ事件の内容を聞かされていない彼らに、新一が死んだと一番最初に伝えたのは快斗だった。

平次は蘭の顔を見た瞬間に泣き崩れ、その場にうずくまった。申し訳ない、申し訳ない……と平次が何度も何度も呟く。

快斗も、目の置くから溢れ出てくる物を抑えきる事ができなかった。そして、事の一抔を、新一の最後を、新一の死を信じられないと言った風で呆然としている彼らに話した。

責めてくれればまだよかったのに……。

快斗は、唇をぎゅっとかみ締めた。鉄の味が口の中に広がる。

責めて、責めて、責めて、罵って、罵って、罵ってくれた方がま

だ気が楽だった。

新一の最後を聞いた蘭は、その場に立ちすくんで、涙を流していたが、平次と快斗を責め立てるような事は決してしなかった。

そして、静かにこう言った

『覚悟してたの』だと。

「俺が、新一を見殺しにしたんだ。」

快斗は、蘭に向かって下げた頭を上げずに言った。地面に、いくつかの小さな染みが出る。

そうさ。俺が新一を殺したんだ。いくら状況が状況でも、新一たちを置いて逃げたのは俺なんだ！ 自分の命を最優先した愚か者はこの俺なんだっ！ もしかしたら、他に助かる道があったのかもしれない。このIQ400の頭で考えれば、新一たちも生きれる道が

……

後悔の念が快斗に押し寄せてきた

快斗はもはや、次から次へと溢れてくるものを止めることは出来なかった。感情のなすがままに涙を流す。

しかし、蘭はそれでも目の前の墓石をただ見つめるだけで、快斗を責めることも、泣く事もせずに平然と立ち尽くしてる。

「っなんで、なんで、責めないんだよおっ」

反応のない蘭に、快斗は感情の塊を爆発させた。

その声に、蘭はゆっくりと振り返り、快斗を視界に捕らえた。顔を涙でぐちゃぐちゃにさせた少年が目に見る。

「俺が、俺が新一の命を捨てたんだぞっ！ 憎くないのかっ」

快斗の身体が崩れ落ちる。

「責めろよっ！ 罵れよっ！ 人殺しだと言えよっ」

心の底から絞り出すように叫ぶ。

「……いえよっ」

最後の言葉は聞き取れないほど小さく弱弱しかった。そして、嗚咽しか聞こえなくなる。快斗は地面に両手をつき、全身を震わせながら泣いた。

「言わないわよ」

そんな様子を上から見ていた蘭は静かに言った。そつとしゃがみ込み、快斗の肩に手を置く。

「快斗君が生きててくれて本当に良かった」

「嘘だっ！」

優しく声を掛けた蘭をキツと睨み上げて、快斗が叫ぶ。

「嘘だ！ 本当は憎くてしょうがないくせにっ！」

「嘘じゃないわよ」

「嘘だ！嘘だ嘘だ嘘だっ……っっ！」

パチーンと、高い音が辺りに響き渡った。

「いい加減にしなさいよ！」

蘭が右手を思い切り振り切り、怒鳴り声を上げた。

「ちよつと蘭っ」

それまで事の成り行きを見ていた園子が、慌てて蘭を止めに入った。

突然の衝撃に、快斗は呆然とジンジンと傷む頬を押さえ、蘭を見上げる。瞳を吊り上げた蘭と目が合った。

「快斗君を責めて、それで新一が戻ってくるのなら、とっくにそうしてるわよ！ でも、そんなことしても新一は帰ってこないの！」

蘭が一気に捲し立てた。

園子が止めに入ったせいで、蘭の体勢は前屈みになる。

新一と同じ顔、同じ声で、そんなこと言わないでよっ！ 思い出
しちゃうじゃない……。

園子に押さえられようが、一度溢れ出したこの気持ちは止まらない。
い。

一番辛いのは、新一と最後に接触したのに、助けられずに自分だけ
生き残った快斗君だったことは十分わかつている。だから、私は
彼を責める事はしなかった。それに、新一からの電話で最悪の結果
になることを覚悟していた。だから新一の死を聞いた時のショック
の強さは、思ったよりも緩和することが出来た。

「もう、いいにしてよ、お願いだから」
小さく吐き出した悲痛な台詞は、柔らかな風に乗って快斗元に届
いた。

お願いだから、貴方は新一に似ているから……

「快斗君が生きて戻ってきてくれて、それで良いじゃない。新一は
運がなかっただけよ」

彼を責めたくなかった。きっと、最後まで頑張ってくれたのだから。
ら。

それに、彼らが生き残ってくれることが、新一の願いだと思っ
たら。

「わかった」

快斗はそつと答えた。

誰からとももなく墓石に向かって手を合わせ、名残惜しそうにその場を後にした。

墓石の両脇に飾られた花はとても綺麗で、優しい風がそつと吹き抜ける。

空は、泣きたいほど青く透き通っていた。

これが、高校生最後の夏の出来事。

それから約半年、僕は大学生になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8018c/>

Drops—ドロップス—

2010年11月24日07時36分発行